

一九七〇年代・民間教育研究団体による「地域の掘りおこし」の実相 — 小出隆司の「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発を中心に —

白井克尚

一、本研究の目的

本研究の目的は、一九七〇年代における民間教育研究団体による「地域の掘りおこし」の取り組みに関して、具体的な事例検討を通じて、その実相を明らかにすることである。金馬は、民間教育研究団体による「自主的に新たな教育内容・方法を開発する動き」が、「世界からみた日本の教育研究の先駆性、先進性」⁽¹⁾を示していると述べている。その中でも、一九七〇年代は、社会科学教育にとって重要な時期のひとつだとされる。なぜならば、「民間教育研究運動における〈生活主義〉と〈科学主義〉をそれぞれどうとらえ、どのようなかわりをもって教育実践を創造しているのか」という課題において、今後の教訓となるものを多く残しているから」⁽³⁾だという。

そこで、本研究では、一九七〇年代における民間教育研究団体による「地域の掘りおこし」の代表的な取り組みと

して、愛知県歴史教育者協議会の小出隆司による「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発に着目し、その実相を明らかにしたい。

小出は、愛知県歴史教育者協議会を代表する小学校社会科教師であった。小出の「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発に関しては、次のような先行研究がある。村田(二〇〇六)は、「小出が担任していた一年生の子どもたちに、戦時中に上野動物園で象をはじめ多くの動物たちが軍の命令で射殺された悲しい物語である『かわいそうなぞう』の読み聞かせをした時、いつも腕白な子どもたちの目にも大粒な涙がひかっただ。それをみて小出は、戦時中、名古屋の東山動物園では二頭の象が守りぬかれたことを思い出し、そのことを子どもたちに話した。こどもたちの『もつとくわしくー!』という声に励まされて、様々な取材を行い、それが一九七六年の歴教協名古屋大会を機会に児童向けの絵物語にまとめられた。」⁽⁴⁾と述べている。また、中妻

(二〇一七)は、小出の「ぞうれっしや」の教育実践が各地で広がった条件について、「一つは、東山動物園と象をめぐる人間のつながりである。」「二つ目は、東山動物園と象をめぐる人間の良心の在り方である。」「三つ目は、現代の様々な問題に対して、それを解決する将来への希望を持つことができることにある。」と論じている。

しかし、これらの先行研究では、小出の「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発の先進性や独創性について論じているものの、一九七〇年代という歴史的状况のなかで、なぜ、小出がそのような教材開発をおこなうことができたのかという背景やその歴史の意義については十分に論じられていない。

教師の教材開発のあり方については、池野(二〇〇九)が、教育内容―教材の系列で進める「上からの教材化」と素材―教材の系列で進める「下からの教材化」という二つのアプローチに分けて論じている。「上からの教材化」の事例については、一九七〇年代の「教育の現代化」の中で支持された数学教育協議会の遠山啓が中心に開発した「水道方式」の教材をあげている。⁶⁾とすれば、なぜ、小出は、一九七〇年代という歴史的状况において、子どもたちの要求に応える形で、いわば「下からの教材化」のような教材開発をおこなうことができたのか。そのような教師の教材

開発の実相について、歴史研究を通じて具体的に明らかにすることに、研究の意義があると考えた。

そこで、本研究では、小出の「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発に焦点を当てて、これまでの先行研究が論じてこなかった以下の二点に注目して考察を進める。

第一に、一九七〇年の民間教育研究団体による「地域の掘りおこし」を通じた教材開発の取り組みが、授業レベルでは、実際に教師のどのような意識に基づいて取り組まれていたのか。

第二に、一九七〇年代の民間教育研究運動においては、〈生活主義〉と〈科学主義〉の結合がめざされたとされるが、そこでは、教師のどのような葛藤や困難を伴うものであったか。

研究の手続きは、以下の通り進める。はじめに、小出が「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発を進めた一九七〇年代における民間教育研究団体が置かれた歴史的状况について、当時の資料をもとに論じる。次に、小出の「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発の取り組みの実相について、資料をもとに実証的に明らかにする。そのために、可能な範囲で、当時の小出の教材開発に関わる一次史料の収集・分析を行い、不明な点に關しては、小出本人への聞き取り調査を補足的に行う。以上の手続きを通して、その実相に迫りたい。

二、一九七〇年代・歴史教育者協議会における「地域の掘りおこし」

民間教育研究団体は、歴史的に見れば、学習指導要領から相対的に距離を置くことで、教材の自主編纂や教育研究活動を推進してきた。しかし、一方では、民間教育研究運動に対して、アナーキズム（無政府主義）やボルシェビズム（共産主義）であるという評価もあり、所属する教師の教育活動において困難が生じる場合もあった。⁷⁾

歴史教育者協議会（以下、歴教協）は、一九四九年七月一四日に東京の文教高等学校で創立大会を開催し、「私たちは限りなく祖国を愛する」、で始まる『歴史教育者協議会設立趣意書』を採択してから、毎年全国大会を開催し、歴史教育に関する研究活動を推進してきた民間教育研究団体である。愛知県では、歴教協の会員によって全県組織を作ろうという意見が高まり、一九六七年九月一七日に名古屋支部のメンバーが中心となり、愛知県歴史教育者協議会（以下、愛知歴教協）が結成された。⁸⁾

一九七〇年代には、歴教協・日本生活教育連盟・教育学研究会などの民間教育研究団体によって「地域に根ざす社会科」⁹⁾実践が全国的に取り組まれた。そうした民間教育研究団体における「地域に根ざす社会科」実践に関連し

て、「地域の掘りおこし」という共通のテーマが生まれた。一九七七年一月に、埼玉県で開催された教育研究全国集会（日本教職員組合が主催する全国的な教育に関する研究会）の社会科分科会の報告を見ても、「地域の掘りおこし」をテーマにした実践が多く登場していた。歴教協による「地域の掘りおこし」の動向については、次のように述べられている。

こうした地域の掘りおこしと教育実践が多様な展開を見せるのは一九七〇年代である。一九六〇年代後半から子どもと地域をみつめた実践が数多く生みだされ、民衆の中の教師、民衆に学ぶ教師として、その多様な授業実践の中において、教育実践の中から生まれた言葉、表現の変革がみられるようになってきていた。

「地域の掘りおこし」分科会は、一九六六年第一八回大会から一九六九年第二一回大会まで地域史分科会としておかれ、従来の郷土史や地方史に対して、地域の主体性を確定し、地域を原点として変革主体の形成を追求する新しい理論と実践の構築を目指すものであった。一九七〇年、第二二回大会から第一グループ「地域・日本・世界」の中の「地域分科会」とされたのだが、歴教協大会における「地域の掘りおこし」分科会に限っても、

沖繩大会で「地域の民衆の歴史を発掘し、教材化していくために、お互いの経験をもちより討論を深めていく」とが課題として提起されて以来、地域の民衆の要求に答える掘りおこしとともに、教材化の理論が追求されてきており、七四年兵庫大会、七五年千葉大会では、教育実践の分散会がもたれ、七六年愛知大会では、掘りおこし運動と教材化を統一していくという観点から、分散会を構成するにいたる。⁽¹⁰⁾

このように歴教協は、一九七〇年代において「地域の掘りおこし」をテーマにした実践に熱心に取り組んだ民間教育研究団体であった。そうした歴教協の「地域の掘りおこし」に関して、佐々木勝男は、そのタイプから、①地域の教材化、②フィールドワーク、③古文書研究、④地域民衆史の掘りおこし運動、の四つに分類している。⁽¹¹⁾ その中でも、①地域の教材化について、「いまや、地域の教材化は、小・中・高の社会科学教育のなかで、一つの流れをつくっている。こうしたなかで社会科学の教育課程、教材内容の編成、教授・学習過程、子どもの社会認識などに根本的な問題を投げかけている。」⁽¹²⁾と述べ、その意義への注目を呼びかけている。

したがって、一九七〇年代の歴教協における「地域の掘りおこし」は、「教師が地域を掘りおこし、教材化するの

みでなく、掘りおこし運動の中で、教師自身の意識変革を基礎に、子どもの学ぶ力、自己形成力をひきだす教材を自主編成する課題を持ちはじめた」と捉えられる。すなわち、歴教協の教師たちは、一九七〇年代における「地域の教材化」を通じて、子どもと地域をみつめ、言葉や表現を変革していたのである。⁽¹³⁾ では、小出は、一九七〇年代においてどのようにして「地域の掘りおこし」に着手し、教材開発に取り組んでいたのか。

三、小出隆司のライフヒストリー

小出隆司は、一九三八年、愛知県名古屋市に生まれる。一九六一年に愛知学芸大学社会科学を卒業し、同年、名古屋市立小学校の教諭となり、一九九九年に定年退職する。その後、愛知教育大学非常勤講師、愛知淑徳大学准教授、愛知県立大学非常勤講師などをつとめる。主な著書には、『ぞうれっしゃがやってきた』（岩崎書店、一九八三年）があり、この絵本は、一九七五年度に担当していた小学二年生を対象に開発した地域教材の自主制作プリントがもとになっている。

小出が、平和教育に取り組もうとした背景には、自らの幼少期の戦争体験があった。

今年は、三〇回目の八月一五日を迎えます。当時、国民学校の一年生であった私は、今、三児の父親。時の流れの早さに驚くばかりです。

堤に葉草を取りに行き、空襲警報になって急いで帰える途中、上空に飛んでいたトンビを艦載機とまちがえて、ドブの溝にとび込んで、頭をかかえていたことや、爆撃で付近の町が炎に包まれ、私の住んでいる家に火が迫ってきたため、妹を背負った母親とともに逃げたときのこと。また、戦後の食糧不足や、悪性インフルで極度に追いつめられた苦しい生活、貧困と空腹との闘いなど、幼い頃の、あの想い出は、私の脳裡に強烈に焼き付いてはなれません。

教師になって以来、折りにふれ、子どもたちに私の体験や、本などをとおして、戦争の残酷さ非常さを知らせながら、平和の大切さを説き、力を合わせて平和な世界を築こうと語りかけてきました。¹⁶（傍線部は筆者）

こうした戦争に対する意識をもつなかで、教科書を捉えた場合、一九六〇年代後半の段階で、教科書記述に関して、次のような課題を持っていた。

教科書における記述は、家永訴訟、また本大会の久司

報告で明らかのように、歴史事実を歪曲し、非科学的になつていきます。「戦争」については、教育的配慮という名目で、戦争の局部的理解が推奨され、国民が歪んだ戦争観を形成するようにしむけられています。記述の特色は、一貫して帝国主義的侵略戦争の侵略性を隠ぺいする方向をとり、戦争を社会の矛盾として扱うことを極力さけています。そればかりか戦争反対の勢力（反戦運動＝愛国心）の存在や、戦争による国民の犠牲にはあまりふれられていません。それ故、子どもたちの中には、戦争を考える場合、帝国主義者による侵略戦争と被支配民族による民族解放戦争とを一樣に罪悪視してしまうものが非常に多い。このような状況の中で、「小学校で戦争をどう教えるか。」の意義はきわめて大きいものがあります。私は戦争を、考える素材としての資料を用意し、子どもたちの思考を練らせることが何より大切なことだと考えます。即ち戦争を局部的理解によってではなく多面的にみつめさせること——「国際的、国内的な政治、経済、社会の矛盾の産物として扱い、その原因、主体、手段、戦術、機能などの総体、として把握すること」がたいせつであると考えます。¹⁷（傍線部は筆者）

こうした小出の平和教育の活動拠点となっていたのが、

愛知県歴教協であった。一九七〇年代初めに、第1回東海ブロック集会（一九七一年一月二〇、二一日）を小出宅で開催するなど、小出は、愛知県歴教協を代表する実践家となっていた。愛知県歴教協の会員として、地域の社会科教育・歴史教育に責任を負うという自負の下、県下に支部をたくさん作ることを使命にして、全国の仲間たちの実践をカバンに入れ、県内を走り回ったという。その成果として一八支部の体制ができ、月一回の学習例会、県委員会の開催、現地見学を各支部周りで主催し、地域の理解を深め合ったと振り返っている⁽⁸⁾。

そして、一九七四年二月、日本教職員組合主催の全国教育研集会（岡山市）に参加した小出は、戦時中、東京の上野動物園で起こった出来事をもとにした絵本教材『かわいそうなぞう』の実践レポートを聞き、「感動的な実践報告ですが、象を殺して初めて戦争の悲惨さを知るといふ点で教材として問題があるのでは。名古屋の動物園では象を守り抜いたという事実があります。」と発言したという。その発言が『日本の教育』（一九七五年）に「そういう本がある」と掲載されたことをきっかけに、「ぞうれっしゃがやってきた」の教材開発を行っていくこととなる。

小出は、自作したガリ版刷りの「ぞうれっしゃがやってきた」（一九七五年七月一五日付）をもとに、小学二年生

に対して読み聞かせを行った。その実践は、一九七五年八月一〜三日、歴史教育者協議会第二七回全国大会（千葉大会）・小学校低学年部会で、「象列車がやってきた」として報告された。そのことがもとになり、『歴史地理教育』第二四〇号（一九七五年八月号）に実践記録が報告され、『愛知民衆の歴史』（一九七六年）にもお話教材として収録された。一九七六年八月一〜五日の歴教協第二八回全国大会（名古屋市）においては、地元開催を機に、絵物語『ぞうれっしゃがやってきた』（山内辰夫・高井昌子絵）として自費出版された。その後の「ぞうれっしゃ」の展開は、フォークソング、演劇、合唱組曲、社会科教科書・英語教科書、平和教育教材、人権教育副読本、アニメーション映画、歌唱紙芝居、国際交流の題材、各種学校の文化祭・総合学習の題材などに広く活用され、世界的にも著名な物語となっている。

四、「ぞうれっしゃがやってきた」の教材開発

小出は、試行錯誤しながら、「ぞうれっしゃがやってきた」の教材開発に着手した。当時の状況について、「私が歴教協に参加した三〇年前（以後、全国大会皆勤）、平和・民主主義・科学的社會認識という用語を使用することさえ白

い目で見られる教育現場の状況があった。嘘のような本当の話。当初『ぞうれっしゃ』も同じ道を歩んだ。」と振り返って述べている。また、一九七五年岡山市で開催された教研集会については、小出が次のように記録している。

新幹線岡山駅前では、右翼団体の大音量の「歓迎」、路上や歩道橋の階段には、赤や白のペンキで「日教組粉砕!!」、会場までの沿道では「解同」朝田派のビラまき姿、会場周辺には岡山県警の大警備陣、最近のこうした光景には、慣れて特別な感じはしないが、やはり不快であった。

統一戦線の逆流現象が、反共という命題で統一されて渦巻いている。権力による分裂策動に乗せられ、さまざまなる形となって、さらけ出している。いわば、革新の真偽が、審判されていく、そういう歴史的状况の下に、いま自分が在ることを膚で感じながら、会場にいそいだ。

小出が「日教組教研全国大会の社会科分科会に自主参加した」際には、「年休」をとって参加したという。では、そうした歴史的状况があった中で、なぜ、小出は「ぞうれっしゃがやってきた」の教材開発に着手できたのか。その経緯について、小出は、次のように述べている。

はじめに、絵本『ぞうれっしゃがやってきた』の誕生について記す。

一九七五年のはじめ、一年生の子どもたちに『かわいそうなぞう』（つちやゆきお著）を読み聞かせた。この話は、戦時中東京の上野動物園で、象をはじめ多くの動物たちが、軍や内務省の命令で次々に殺されていく悲しい物語である。いつも元気で腕白な子どもたちの目に大粒の涙が光り、教室は子どもたちのすすり泣きに包まれた。

子どもたちの様子に当惑した私は、地元名古屋の東山動物園では、二頭の象が守り抜かれたことを思い出し、悲しむ子どもたちにそのことを話した。すると子どもたちの表情が一変して明るくなった。子どもたちの様子を見てほっとした。しかし、それで終わらなかつた。「先生、その話もつとくわしく話して!」と、せがんだ。でも、私はその事実（『本土空襲記録—水谷メモ』パンフ。中部日本新聞）しか知らず困った。一年生だからそのうちに忘れてくれるだろうと考えていたが、そうはいかなくて子どもたちの追及が続いた。

ある日、Yさんが私のそばにきて「先生、ウソを言うことはいけないことだと、お母さんが言っていたよ」と言って席にもどった。このひと突きの言葉が契機となり、守り抜かれた象にまつわる歴史を掘り起こすことと

なった。

ちよūdその頃、各地で戦争体験の掘りおこしや空襲を記録する取り組みが始められていた。愛知県歴史地理教育者協議会でも、県下の各地域の民衆の歴史を掘り起こす活動を進めていた。

小出隆司「二〇世紀から二世紀に走りつづけるぞうれししゃ」
自作プリント、二〇〇九年版、二頁（傍線部は筆者）

ここからは、一年生の子どもたちの要求に応える形で、愛知県歴教協における「地域の掘りおこし」と関連した活動として、「ぞうれししゃがやってきた」の教材開発に取り組んだことが分かる。小出が、全国教研集会において、「名古屋の東山動物園では助けた事例があるし作品にもなっている。こうした『かわいそうなぞ』う（ママ）だけでなく、殺さなかったそれも扱おう。小学校低学年で、『なぜ起こったのか、なぜ防げなかったのか』を扱うのはむりだ」と発言した記録が残っている。つまり、小出は、小学校低学年の発達段階の限界を踏まえて、『かわいそうなぞう』とは別の教材づくりの必要性を主張したのである。

しかし、教材づくりのための調査取材は、また困難を伴うものであった。続けて小出は述べる。

同年（筆者注…一九七五）二月、岡山県で開催された日教組教研全国大会の社会科分科会に自主参加した。絵本『かわいそうなぞう』を題材にした実践報告を聞き感動した。しかし、「感動的な実践報告ですが、象を殺して初めて戦争の悲惨さを知るという点で教材として問題があるのでは。名古屋の動物園では象を守り抜いたという事実があります。」と発言してしまった。ところが、『日本の教育』（一九七五年）で、「そういう本がある」と紹介されていた。幻の本の出現である。これにはまいった。そんなある日、テレビドラマを見ていて電話帳から人捜しをする場面からヒントを得て、東山動物園初代園長北王英一氏（故人）の所在を確認した。電話帳から市内に在住されてみえることがわかり早速電話をした。それまでの経緯をお話したところ快く会ってくださいというご返事をいただいた。天に昇る気持ちで北王邸をお訪ねした。

「戦後三〇年を経過して、痛ましい思いが夢枕に出なくなつた。あなたは、わたしのつらい胸中を引っ掻き回されるのですね。」（要旨）と言われた。会っていただけの喜びが先行して、北王氏の胸中への配慮を欠いていた。自分の軽率さをお詫びしてその日は帰路に就いた。忘れたい事柄を掘り起こされて、いろいろなおもいが錯綜して苦渋を乗り越えて協力して下さつた北王園長さんはじ

め関係者の方々のご協力に頭が下がる思いであった。

歴史の掘りおこしという行為は、当事者にあつては様々な意味で歴史の再評価がともない、個々の人権に深く関わる問題である。それ故に、この点を、最大限に配慮しなくてはならないということ強く心に刻印した。その後も、取材を続けている。北王氏の故郷を訪ねての取材、象列車に乗った人たち、そのために奮闘された先方。子ども議会を体験された人たち、その後の出来事。動物の射殺を任務とした猟友会人たち、象列車を運転された機関士、当時の貴重な写真の提供など、新しい出会いを重ねている。

小出隆司「二〇世紀から二一世紀に走りつづけるぞうれっしゃ」

自作プリント、二〇〇九年版、三一四頁（下線部は筆者）

ここで小出が、「会っていただけの喜びが先行して、北王氏の胸中への配慮を欠いていた。自分の軽率さをお詫びしてその日は帰路に就いた」「歴史の掘りおこしという行為は、当事者にあつては様々な意味で歴史の再評価がともない、個々の人権に深く関わる問題である。それ故に、この点を、最大限に配慮しなくてはならないということを強く心に刻印した」と反省したように、教材開発のための取材調査は、失敗や苦勞の連続であったことがうかがえる。

では、それでもなお、小出が「ぞうれっしゃがやってき

た」の教材開発にこだわった理由は、なぜか。小出が教材化に至った理由は、次の三つが考えられる。

一つには、小学低学年の担任経験を通じて、子どもたちの素朴な願いに応えようとしたためであった。小出は、当時、「低・中学年の社会科学学習では、感性的認識を大切にすることが、科学的な社会認識、歴史的認識を養う基礎になる」という考えを持っていた。そうした小学校低学年の子どもたちなりの「先生、その話もつくわしく話して！」という声や、「ウソを言うことはいけないことだ」という追及を大切に受け止めることができ、感性的認識に合わせた教材づくりの必要性を感じたのである。

二つ目は、自らの戦争体験を通じて、地域における戦争の「抵抗」の事実を教える必要性を感じたためであった。それ以前より小出は、「私は戦争を、考える素材としての資料を用意し、子どもたちの思考を練らせることが何より大切なことだと考えます。即ち戦争を局部的理解によってではなく多面的にみつめさせること」²³⁾が大切であると述べていた。そのために、絵本作品という形で、地域における戦争の「被害」だけでなく、「抵抗」の事実を見つめさせることを大切にしようとしたのである。

三つ目は、歴教協の「地域の掘りおこし」への参加を通じて、「地域をとりあげると子どもたちがいきいきする」

といった「地域の教材化」への理解を深めていたためであった。また、教研集会に参加していた岩手県の中島一氏が、『歴史地理教育』の読書の広場に、「象を殺す話とあわせて、生かす話が語られたとき、はじめて、子どもの質が高まって、心の奥底からの重みをもった『戦争はなぜおこったのだろうか』『どうして戦争を防ぐことができなかったのだろうか』という疑問が出てくるのではないだろうか。象を生かした話をぜひ、広めてほしいと思います」と投稿した言葉にも励まされたという。

以上の理由から、小出は、「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発に思い至り、自作教材を活用した授業実践に取り組んでいったのである。つまり、小出が「ぞうれっしやがやってきた」の教材開発に着手した背景には、子どもたちの素朴な願いに応えようとしたことと、自らの戦争体験があったこと、「地域の教材化」への理解を深めていたためであったとまとめることができる。

五、自作教材「ぞうれっしやがやってきた」を活用した授業実践

小出は、一九七五年七月一日に、「ぞうれっしやがやってきた」の自作プリント⁽²⁶⁾を完成させ、当時担任していた小

学校二年生を対象に、その自作教材を活用した授業実践に取り組んでいた。授業実践の動機については、一九七五年度・歴教協千葉大会の記録において、次のように報告されている。

○象列車がやってきた

名古屋の東山動物園の象は、戦争中軍部の手からどう守り抜かれたのかという点について、小出がほりおこした事実をもとにお話を創作し、実践したものの。小出がこの実践をしようと思った動機は、「かわいそうなぞう」を読んであげると、同情と哀れみの感想しか出てこない。ここをのり越える「ではなぜ戦争がおきたのか」「だれが戦争をおこしたのか」を一步つっこんでとらえることのできる子にしたいととりにくんだ。民衆が戦時下のなかで、ささやかな、ギリギリの抵抗をしていたことも教えたかったことの一つである。

また、動物を心から愛しつづけた人々のいたことも、感動を持って感じとってもらいたかったことであった。氏の指摘によると、戦争そのものの本質を乗せた本が少ない。だから、社会的事実語りものの創作もやってみようという目的が働いていたことも事実であった。

小川護・小沢勇「六幼年 七小学校低学年」『歴史地理教育』第二四四号、一九七五年一月臨時増刊号、六二―六三頁

「ここで『ではなぜ戦争がおきたのか』『だれが戦争をおこしたのか』を一步つっこんでとらえることのできる子にしたいとてとりくんだ。」
 「民衆が戦時下のなかで、ささやかな、ギリギリの抵抗をしていたことも教えたかったことの一つである。また、動物を心から愛しつづけた人々のいたことも、感動を持って感じとってもらいたかったことであった。「社会的事実語りものの創作もやってみよう」というように、先述の小出が教材化に至った三つの理由が、裏付けられることが確認できる。

授業実践の流れは、表1の通りである。ここからは、授業実践の特質として、以下の三点を指摘することができる。

一つは、「絵本を読み聞かせる」「作文を書かせる」「感想を話し合う」といった授業展開の流れを大切にしている点である。そうした小学校低学年の子どもたちの発達段階への着目は、「私は、社会科で、文学教材が多く活用されつつあることは大変いいことだと思うが、扱う作品から、何を引き出すか、また、子どもたちから何がひき出せるのか、教材としての有効性

表1 自作教材「ぞうれっしゃがやってきた」を活用した授業実践の流れ

段階	学習活動・教師の行為	資料
1次	①「かわいそうなぞう」を読み聞かせる。 → 作文を書かせる。 → 感想を出し合う。	・「かわいそうなぞう」『季刊教師のはぐるま』3号、部落問題研究所、1969年
2次	②父母の戦争体験を聞いてくる。 → クラスで発表する。	※父母の年齢が若くて、限られた話しか聞き取れなかった。
3次	③『ぞうれっしゃがやってきた』を読み聞かせる。 → 作文を書かせる。 → 感想を話し合う。	・自作プリント
4次	④『糸井ちゃんせんそうのお話してあげる』を読み聞かせる。 → クラスで話し合う。 C: なぜ、戦争をするの? C: 戦争ってどんなこと?	・八木義之介『絵本 糸井ちゃんせんそうのお話してあげる』蒼海出版、1973年
5次	⑤『村いちばんのさくらの木』『四人の兵士のものがたり』を読み聞かせる。	・来栖良夫『絵本 むらいちばんのさくらの木』岩崎書店、1972年 ・代田昇『絵本 四人の兵士のものがたり』あすなろ書房、1973年
6次	⑥日本軍の残虐行為に触れる必要性を感じ、『少年少女おはなし日本歴史』を読み聞かせる。 C: アジアで日本人は何をしたかについて知る	・上川淳『少年少女おはなし日本歴史』岩崎書店、1973年

小出隆司「象列車がやってきた」『歴史地理教育』第240号、1975年8月号、84-85頁より筆者作成

と限界を見きわめて授業にとり組む必要性を感じた。」⁽²⁷⁾と
いった発言からも確認できる。また、子どもの表現への着
目は、小出を『学級文集』作成にも向かわせていたのであ
る。⁽²⁸⁾

二つ目は、戦争に対する「加害」と「被害」の両面から
捉えさせようとしている点である。さまざまな絵本を資料
として取り上げている点に関連して小出は、この教材をと
りあげる場合必ず、『かわいそうなぞう』（つちやゆきお作）
または、『そしてトンキーはしんだ』（たなべまもる作）を
併読することになっていると述べている。なぜならば、「大
きな違いは、『ぞうれっしゃ』はぞうを守り抜きましたが、
上野動物園では、ぞうを死に追いやってしまいました。こ
の両者を対比して学習することにより、動物園の人たちと
動物とのかかわり方や命をおろそかにする者への怒り、戦
争の恐ろしさ、戦争に対する疑問の目を育てたいと考え
て」⁽²⁹⁾「いるからだという。すなわち、小出は、社会科授業に
おいて、戦争に対して「加害」と「被害」の両面から捉え
させ、戦争の恐ろしさや戦争に対する疑問の目を育てよう
としていたのである。

三つ目は、社会科カリキュラムの自主編成や自作教材を
用いた単元の展開をおこなっている点である。小出は、「地
域をとりあげると、子どもたちが、いきいきする」「地域

には、すばらしい教育力がある」ことを認識していた。そ
のために、副読本やワークブックなど、社会科教材の自
主編成を進め、社会科カリキュラムの組み換え行っていた
のである。そこで、「教師は、子どもたちと共に地域を見、
調べ、考える作業を重視していくことが大切です。現実を
正しくキャッチする努力をし、楽しく、わかる授業をめざ
して、さらに一歩前進するために支部の仲間とがんばりた
いと思います」⁽³⁰⁾と述べ、「地域の教材化」に取り組んでい
たのである。

以上のように、小出は、「ぞうれっしゃ」がやってきた」
の授業実践に際して、小学校低学年の子どもたちの発達段
階に着目しながら、戦争に対する「加害」と「被害」の両
面から捉えさせようとして社会科カリキュラムの自主編成
をおこなっていたのである。このような小出の「地域の教
材化」の取り組みは、その後の愛知県歴教協の支部活動で
ある「地域の掘りおこし」運動⁽³¹⁾に連なっていく。

六、本研究のまとめ

本研究のまとめとして、以下の三点にわたって論じるこ
とができる。

第一に、小出は、小学低学年の担任経験を通じて、子ど

もたちの素朴な願いに応えようとして「ぞうれっしやがやつてきた」の教材開発をおこない、授業実践では、子どもたちの発達段階を踏まえて、「絵本を読み聞かせる」「作文を書かせる」「感想を話し合う」といった授業展開の流れを大切にしていた点である。すなわち、一九七〇年代における民間教育研究活動の「地域の掘りおこし」の中では、子どもの思いや発達段階への着目がなされていたことが明らかにされる。

第二に、小出は、自らの戦争体験を通じて、地域における戦争の「抵抗」の事実を教える必要性を感じて「ぞうれっしやがやつてきた」の教材開発をおこない、授業実践では、戦争に対する「加害」と「被害」の両面から捉えさせようとしていた点である。つまり、一九七〇年代における民間教育研究活動の「地域の掘りおこし」の中では、地域における戦争の「抵抗」に目を向けさせ、多角的な考えを持つことを目指していたことが明らかにされる。

第三に、小出は、歴教協の「地域の掘りおこし」運動への参加を通じて、「地域の教材化」の意義への理解を深めて「ぞうれっしやがやつてきた」の教材開発をおこない、それを活用して社会科カリキュラムの自主編成や自作教材を用いた単元開発をおこなっていた点である。したがって、一九七〇年代における民間教育研究活動の「地域の掘りお

こし」の中では、教師は、地域における取材調査に基づいて、社会科カリキュラムの自主編成や、自作教材を用いた単元開発をおこなっていたことが明らかにされる。

以上、小出の事例からは、一九七〇年代における「地域の教材化」が、小学校低学年の子どもたちの素朴な願いに応えようとしたことや、地域における自らの戦争体験、愛知県歴教協での「地域の掘りおこし」運動などが背景にあったことが明らかにされる。こうした点からは、一九七〇年代における民間教育研究活動の「地域の掘りおこし」が、「上」か「下」かといった単純構図のアプローチではなく、教師個人の思いにもとづくことで、子どもの願いや自らの経験を踏まえて教材開発に取り組んでいたことや、学習指導要領から相対的に離れて、社会科カリキュラムを自主編成したり、自作教材を用いた単元開発をおこなうことができたという歴史的事実が示される。

なお、本研究では、民間教育研究運動の「地域の掘りおこし」の事例について「地域の教材化」を中心に考察したため、それとは異なる取り組みについては、十分に検討することができなかった。この点は、今後の研究課題とした。



ぞうれっしやが やって来た
 お中の さむい ありきのこです。どんよりくもた まいろう空がまじり
 りつ 小龍が ゲーッと 音を たてて 歩いて きました。
 その中を 四つ方角 ぞうのかわり おねえさんだ つきえわたり 歩いてい
 ました。
 いちばん まるの ぞうは イビシイ ぞう。 そのあとに エルドが ついでに し、げま
 長い ねんせし、わりの げま、つぎに、その二が エルドの し、げま、そして、矢い公
 が、その二の し、げま、先代は、はなで、ついでに、いきました。
 この四つ方角の ぞうたちは すみやかに、あまーりさんから、東へつづつ、あんに、う
 りわたり、あんに、つぎに、ていど、ぞうつが、い、おねえさんたちは、月には、ひん、ま
 かへて、いました。 二れまで、じぶん、ぞう、ま、よ、う、に、わ、り、あ、ん、じ、を、み、ま
 た、ぞうと、わ、り、あ、ん、じ、を、み、ま、よ、う、に、わ、り、あ、ん、じ、を、み、ま、よ、う、に、わ、り、あ、ん、じ、を、み、ま

小出隆司「ぞうれっしやがやってきた」自作プリント (1975年7月15日付)

【付記】

小出隆司氏への聞き取り調査は、二〇二二年六月一日、「ぞうれっしやの家」(小出氏の自宅) において行った。当時のお話を聞かせていただき、貴重な資料を提供していただいた小出氏に、この場を借りて感謝を表したい。

【註】

- (1) 金馬国晴「自主的研究団体による研究」日本教師教育学会編『教師教育研究ハンドブック』学文社、二〇一七年、二九九頁。
- (2) 香川七海「白井春夫『人間の歴史』にみる一九六〇～一九七〇年代社会科教育『現代化』の実相——国史を超越する視点と『ものづくり』という方途の獲得——」日本教科教育学会誌」日本教科教育学会、第四一卷第三号、二〇一八年、六八頁
- (3) 白井嘉一「教育実践学と教育方法論」日本標準、二〇一〇年、一八一—一九頁。
- (4) 村田徹也「戦後愛知の民間教育研究運動の歩み」風媒社、二〇〇六年、二二八—二二九頁。
- (5) 中妻雅彦「小出先生、そして『ぞう列車』」『愛知県歴史協五〇年史一九六七—二〇一七』愛知県歴史教育者協議会、二〇一七年、八六—八八頁。

(6) 池野範男「教材開発アプローチ」日本教育方法学会編

『日本の授業研究 授業研究の方法と形態(下巻)』学
文社、二〇〇七年、三五―四二頁。

(7) 小林千枝子「教育にとって『民間』とは何か」『思
想の科学研究会年報―PUBLIKO―』第四号、
二〇二二年一月、五八頁。

(8) 前掲、村田徹也『戦後愛知の民間教育研究運動の歩み』、
五六―五七頁。

(9) 峯岸良治『地域に根ざす社会科』実践の歴史的展開
と授業開発―授業内容と授業展開を視点として―関
西学院大学出版会、二〇一〇年。

(10) 歴史教育者協議会『地域に根ざす歴史教育の創造―歴
史協三〇年の成果と課題―』明治図書、一九七九年、
一八二頁。

(11) 佐々木勝男「地域の掘りおこしと社会科教育・歴史教
育」日本民間教育研究団体連絡会編『日本の社会科
三〇年』民衆社、一九七七年、一六三頁。

(12) 同前、同書、一六七頁。

(13) 前掲、歴史教育者協議会『地域に根ざす歴史教育の創
造―歴史協三〇年の成果と課題―』、一八三頁。

(14) 大槻健・白井嘉一編『小学校社会科の新展開―豊
かな社会認識の形成を目指す授業―』あゆみ出版、

一九八二年、二三九頁。戦後の教育実践史上において

生活綴方が注目されたのが、一九五〇年代と一九七〇
年代においてであったとする歴史的事実は、「地域の
教材化」という共通の背景をもっていたと考えられる。

なお、一九五〇年代における「地域の教材化」に関し
ては、白井克尚『戦後日本の郷土教育実践に関する歴
史的研究―生活綴方とフィールド・ワークの結びつき
―』唯学書房、二〇二〇年を参照。

(15) 小出隆司氏への聞き取り調査は、二〇二二年六月一六
日、「ぞうれっしゃの家」(小出氏の自宅)において行っ
た。

(16) 小出隆司「象列車がやってきた」『歴史地理教育』第
二四〇号、一九七五年八月号、八四頁。

(17) 小出隆司「児童の歴史認識―資料ノートを使つての
実践(小学六年)―」『歴史地理教育』第二三七号、
一九六七年一〇月、一八三頁。

(18) 小出隆司「五〇年の歴教協力の活動で取り組めたこと
は」『愛知県歴教協五〇年史一九六七・二〇一七』愛
知県歴史教育者協議会、二〇一七年、五一―五二頁。

(19) 小出隆司「明日に向かって、今日も走りつづけるぞう
れっしゃ!」歴史教育者協議会編『歴史教育五〇年の
あゆみと課題』未来社、一九九七年、二一九頁。

- (20) 小出隆司「全国教研集會に参加して 日教組第二四次
日高教第二二次（社会科教育）分科会」「歴史地理教育」
第二三六号、一九七五年四月、四八頁。
- (21) 前掲、小出氏への聞き取り調査記録より。
- (22) 「第三分科会 社会科教育」日本教職員組合『日本の教
育』第二四集、一ツ橋書房、一九七五年六月一〇日、
一〇一頁。
- (23) 前掲、小出隆司「全国教研集會に参加して 日教組第
二四次 日高教第二二次（社会科教育）分科会」、四八頁。
- (24) 前掲、小出隆司「児童の歴史認識―資料ノートを使っ
ての実践（小学六年）―」、一八三頁。
- (25) 小出隆司「ぞうれっしゃ誕生記」「ぞうれっしゃよ走
れ」労働旬報社、一九八九年、一五四頁。
- (26) この自作プリントは、『ぞうれっしゃがやってきた』
が出版される以前の貴重な一次史料である。貴重な資
料であることを鑑み、本論の最終頁に【参考資料】と
して一部分を掲載する。貴重な資料を提供いただいた
小出氏に改めて感謝を表したい。
- (27) 前掲、小出隆司「全国教研集會に参加して 日教組第
二四次 日高教第二二次（社会科教育）分科会」、四八
―四九頁。
- (28) 前掲、小出氏への聞き取り調査記録より。
- (29) 前掲、小出隆司「ぞうれっしゃ誕生記」、二二五―
二二六頁。
- (30) 小出隆司「副読本・ワークブック」の批判と生かし方・
小学校中学年のばあい」「歴史地理教育」第二三九号、
一九七五年七月、二七頁。
- (31) 愛知県歴史教育者協議会編『愛知民衆の歴史』愛知県
歴史教育者協議会、一九七六年。